

特別支援教科書『おんがく☆』（星本）と 小学校音楽教科書の表記の差異

鷺野 彰子*

要旨 現在の小学校音楽教科書は、かつて（数十年前）の教科書と比較すると大きく異なる。だがこれらの教科書は決して見やすいものとはいえない。本稿では、小学校課程の2種類の教科書（『おんがくのおくりもの』と『小学生のおんがく』）と特別支援教科書『おんがく☆』（星本）の教科書紙面上における情報提供方法、つまり表記について考察した。

そこから明らかになったのは、教科書に託された役割の差異である。小学校音楽教科書は、児童が修得すべき内容をなるべく全て紙面上に載せようとするのに対し、星本はできる限り厳選した情報のみを載せようとした。星本の教科書紙面は、『絵本唱歌』に近似している。

児童に必要な教科書掲載必須事項を厳選すること、そしてその表記の方法を見直すことで教科書の見やすさは改善できるのではないか。表記方法の見直しについては、目標や指示を紙面の複数箇所に様々な表記で配置するのではなく、集約してコンパクトに示すこと、あるいはQRコードを活用して紙面以外の部分に詳細に記載する、といったことが考えられる。

キーワード 特別支援教科書『おんがく☆』（星本）、小学校音楽教科書、『絵本唱歌（エホンシャウカ）』、教科書比較

はじめに

保育者養成校である本学こどもコースに設置された「幼児と表現」（3年次）及び本学大学院子ども教育専攻に設置された「教育課題研究B」（大学院1年次）の授業において、保幼小連携の観点から小学校課程で用いられる音楽教科書を検討する時間を設けている。特に小学校

1年生の教科書を注意深く検討することで、卒園から小学課程へのスムーズな移行についての意識を高めると同時に、幼児教育における教材の活用方法についての意識を高めることがその主なねらいである。特に後者において、就学前段階においては指定の教材がなく、どのような教材をどのように用いるかは全て保育者の裁量に任されている。自由度が高い反面、保育者

* 福岡県立大学人間社会学部・准教授

各自が意識的に検討し、多様なモデルを獲得しておく必要がある。

例年これらの授業において、小学校課程の教科書として『おんがくのおくりもの』（教育出版）と『小学生のおんがく』（教育芸術社）の2種類、加えて特別支援教科書『おんがく☆』（東京書籍、以下、「星本」と記載）を学生に紹介している。授業では、はじめに前者の2種類の教科書を紹介したのちに、星本を紹介する、という手順をとっている。この授業の際に学生は例年同じ反応を見せる。まずは小学校音楽教科書を見て懐かしさやイラストなどの可愛さに歓声を上げるが、ついで星本を紹介すると俄かに先の小学校音楽教科書に対して「ごちゃごちゃしてわかりにくいかも」と批判的な声があがる。内容の点においてはかつての比較にならないほど充実しており、非常に工夫に富んだ小学校音楽教科書だが、紙面上の情報の提示方法の点においては改善の余地がある。

本稿では、小学校1年生のための音楽教科書における情報の提示の課題点に焦点をあてて考察する。ICTの活用が容易で身近になった現在、教科書も今後大きく変化を遂げることが想定される。教科書の情報の提示方法について新たな視点や論点が必要になるが、その起点として、本稿では現在の教科書の課題点について検討したい。

1. 小学校音楽教科書の「見せ方」の課題点

現在の小学校音楽教科書は、かつて（数十年前）の教科書と比較すると大きく異なる。教科書のサイズは二回りほど大きくなり、多様な絵や写真、そして吹き出しや図表が用いられている。何よりも目を惹くのはヴィヴィットな色遣

いである。単調な説明に終始しないよう、視覚に訴えることが意識されて作成されている。

だがそれらの工夫にも関わらず、これらの教科書は決して見やすいものとはいえない。非常に多岐にわたる情報が限られた紙面に盛り込まれており、一見して取り組む内容と目的を把握することは難しい。例えば、『おんがくのおくりもの1』の《ぶんぶんぶん》(pp. 16-17)の見開き2ページに収められた内容は、楽譜とイラストに加え、さらに7種類の情報が掲載されている(図1)。他方の『小学生のおんがく1』の《ぶんぶんぶん》(pp. 24-25)の見開き2ページに収められた内容は、曲の歌詞、楽譜、2種類のイラスト(p. 24とp. 25各1種類)に加え、さらに9種類もの情報が掲載されている(図2)。

これほど多くの情報が網羅されるに至るのは、音楽がもつ特有の要因がある。その要因とは、音楽が体の動きを通じて演奏されること、そして楽譜という文字以外の表記が用いられていることである。拍やリズム、楽器の扱い方に至るまでの多彩な内容は、本来は体の動きを伴って音を通じて表現されるものであるが、それを紙媒体で視覚的に伝えようとするのは容易ではない。さらに、非常に感覚的な要素が多く含まれるが、それを共有しようとするのも容易ではない。自己と他者の感覚に対する意識をずれることなく言語化して共有できるよう、さまざまな例や示唆的表現を駆使して教科書紙面に書き出されている。また、楽譜の記譜の解読方法の修得は容易ではないため、それを補助するための様々な工夫が紙面に盛り込まれていることも情報過多の要因となっている。

【図1】《ぶんぶんぶん》（『おんがくのおくりもの1』）

リズムとなかよし

① ② ③ ④

⑤

てびょうし

①

⑥

⑦

⑧

⑨

16

17

【図2】《ぶんぶんぶん》（『小学生のおんがく1』）

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

24

25

2. 小学校音楽教科書と特別支援教科書『おんがく☆』(星本)の比較

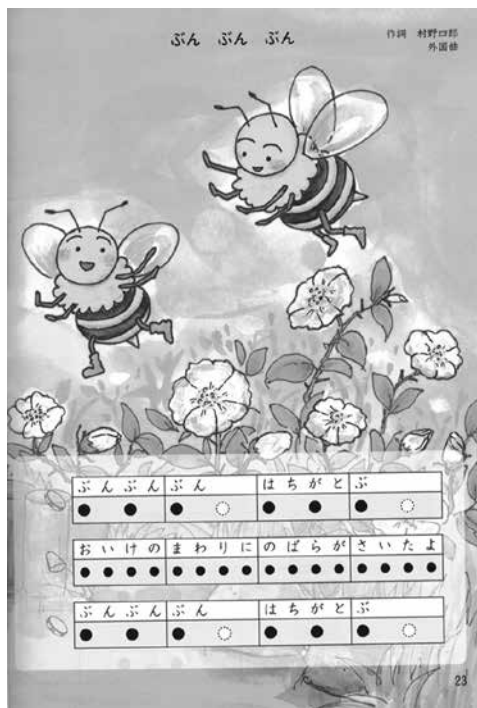
特別支援教科書『おんがく☆』、つまり星本は特別支援学校小学部知的障害者用の教科書である。この教科書が作成されることになった経緯について、平成23年に発行された『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』冒頭の「教科書改訂の趣旨」に詳しく記載されている。最初の特別支援学校知的障害者用音楽教科書は、昭和39年6月に初めて作成されたが、その後学習指導要領の改訂に伴い順次更新された。平成23年の改訂版には、「知的発達の程度等が多様な児童が親しみを持てる楽器をより多く扱えるようにするとともに、さし絵は児童が興味・関心を持ち、より学習意欲がたかるように改める」¹ことが基本方針の一つに含まれる。

教科書は各学年に対応するのではなく、小学部は3段階に分られ、段階ごとに『おんがく☆』、『おんがく☆☆』、『おんがく☆☆☆』の3冊にまとめられている。第1段階は「知的障害の程度は、比較的強く、他人との意思の疎通に困難があり、日常生活を営むのにはほぼ常時援助が必要である者を対象」、第2段階は「1段階ほどではないが、他人との意思の疎通に困難があり、日常生活を営むのに頻繁に援助を必要とする者を対象」、第3段階は「他人との意思の疎通や日常生活を営む際に困難さが見られる。適宜援助を必要とする者を対象」として作成されている²。

先に確認した《ぶんぶんぶん》の曲は『おんがく☆☆』にも掲載されているが、それは図3のようなものである。

この星本で《ぶんぶんぶん》は、2匹の蜂が

【図3】《ぶんぶんぶん》(『おんがく☆☆』)



花畑の上を飛ぶイラストと、歌詞にリズム打ちのための表示が添えられたもののみが示されている。一切の説明がないばかりでなく、五線譜の楽譜も含まれず、非常にシンプルな構成をとる。このようなシンプルな構成はこの曲に限られているわけではない。『おんがく☆☆☆』では若干の情報が増えるものの、『おんがく☆』から『おんがく☆☆☆』にいたるまで、ほとんどのページが歌詞とイラストのみで構成されている。楽譜は全て教科書末尾に掲載されているが、ここには旋律と歌詞に加えて伴奏のためのコードネームも表示されており、基本的には指導者や保護者等が使用することが想定されていると考えられる。イラストも歌詞に書かれた内容をできるだけ忠実に表現する姿勢が確認できる。

別の例として、3つの教科書に共通して掲載

された《かたつむり》を確認してみたい。『おんがくのおくりもの』では、見開き2ページにわたって写真を織り交ぜたイラストが目を引き（図4）。かたつむりだけでなく、雨や虹、そして刺繍で表現された紫陽花が配置されており、梅雨の時期を想像させるイラストとなっている。さらに紫陽花の後方部分には4名の子どもたちがそれぞれ別のポーズをとっている写真が配置されている。「うたにあわせてみぶりであそぼう」という文言と右上の吹き出しに書かれた同様の内容からも、子どもたちのポーズがその身振りの方法を示唆していることが窺える。ここではそれ以上の説明は加えられていない。『小学生のおんがく』でも、かたつむりに加えて雨や紫陽花が美しく描かれている（図5）。この教科書ではこの曲は拍感を感じながら歌うことが課題とされており、リズム打

ちの方法を示す図が掲載されているほか、複数の説明書きも含まれる。「かたつむりによびかけるようなきもちでうたいましょう。」「はくにのって、あかるいこえでうたいましょう。」「くちのなかをよくあけて、ことばをはっきりうたおう。」と3つの異なる指示が異なる大きさの字でバラバラに配置されている。一方で『おんがく☆』の場合は、至ってシンプルである（図6）。なつのうた5曲の冒頭であることから左上に「なつのうた」と記載されている他は、イラストと歌詞のみが配置されている。ここでもイラストに紫陽花、そしてかたつむりの乗る葉のところどころ雨粒がついていることから雨のシーズンであることを連想させるものの、絵の中心にはっきりと目立つ形で、かたつむりが配置されたイラストとなっている。

【図4】《かたつむり》（『おんがくのおくりもの1』）



【図5】《かたつむり》(『小学生のおんがく1』)

**かたつむりに よびかけるような
きもちで うたいましょう。**

●はくに のって、あかるい こえて うたいましょう。

一、でんでん むしむし
かたつむり
おまえの あたまは
どこに ある
つのだせ やりだせ
あたま だせ

二、でんでん むしむし
かたつむり
おまえの めだまは
どこに ある
つのだせ やりだせ
めだま だせ

こころの
うた **かたつむり**

♩=85-95 文部省唱歌

1 だんでん むしむし かたつむり おまえの あたまは
2 だんでん むしむし かたつむり おまえの めだまは

どこにある つのだせ やりだせ あたま だせ
どこにある つのだせ やりだせ めだま だせ

くちの なかを よく あけて、
ことばを はっきり うたおう。

●うたにあわせて、ならった リズムを うちましよう。

15・16べえじ たん たん たん 96 たん たん たん 96
19べえじ たん たん たん たん たん たん たん 96
21べえじ たん 96 たん 96 たん たん たん 96

ならった
リズム

ないう リズム はく フレーズ

【図6】《かたつむり》(『おんがく☆』)



かたつむり
でんでん むしむし
かたつむり
おまえの あたまは
どこにある
つのだせ
やりだせ
あたま だせ

文部省唱歌

3. 教科書の果たす役割の違い

ここでは2種類の小学校音楽教科書と星本から《ぶんぶんぶん》と《かたつむり》の2曲の掲載部分について確認したが、他の曲についても、各教科書はおおよそ類似した傾向をもつ。『おんがくのおくりもの』と『小学生のおんがく』がより多くの情報を提供しようとするのに対し、星本はできる限り情報を絞って提供しようとしている。設定している課題目標が異なることを考慮しても、その差異は著しい。

この傾向の乖離についてどう考えるべきであろうか。言い換えるならば、小学校音楽教科書の紙面はなぜこれほど情報過多の状態になってしまうのだろうか。それは、これらの教科書が修得すべき内容を子どもたちに直接的に伝えようとするためではないか。これら2種類の小

学校音楽教科書の場合、子どもたちが教師を介さずに自主学習ができるほど、各ページに細かく具体的な説明が施されている。ただし音楽の学習の場合には、実際に身体を動かして演奏する実技が大部分を占め、しかも感覚的な要素が強く、非言語的な性格が強いことから、紙面から言葉による説明で伝えるのは至難の業である。その結果として、これらの多くの説明が盛り込まれるようになったとは考えられまいか。

他方の星本の場合、絵と歌詞のみのシンプルな紙面は、昭和初期に日本音楽協会が発行した『エホンシャウカ』（以下、『絵本唱歌』と記載）と構成が非常に近似している。『絵本唱歌』は春夏秋冬の4編を1セットとして2セット分、昭和6年から8年にかけて発行された。1つのセットは全部で40曲が含まれ、春の巻、夏の巻、秋の巻、冬の巻はそれぞれ10曲ずつで構成され

ている。各ページは絵がメインに据えられ、その横に歌詞のみが配置されている（図7）。楽譜は別の冊子として添えられている（図8）。

『絵本唱歌』について、福井直秋は「子供がこの本を一寸見ただけで歌いたくなり、又は手に取って見たくなるよう、即ち子供に親しみのある名前及び体裁にしている」と述べているほか、その対象を「幼稚園から小学校へ入学した当初即ち一年位の児童にまで通じて幼少な子供すべてに歌わせてよろしい」と述べている³。

『絵本唱歌』はその当時作曲された曲について考察する上で非常に興味深い資料である⁴。福井は同書で、拍子は2/4が良い、曲は短い方が良い、歌いやすい音程が良い、短調の曲は避けるべきなどと明瞭に述べ、その理由を示しているが、特に興味深いのは次の2点である。ひとつは、調子（つまり何調であるか）につい

【図7】《チューリップ》（『エホンシャウカ ナツノマキ』）



【図8】《チューリップ》伴奏譜（『エホンシャウカ ナツノマキ』）

チューリップ

サ イ タ サ イ タ タンゴ ノ ハ タ

タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ

ノ ハ タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ

3

ての言及と、もうひとつは歌の開始音についての言及である。前者について福井は「譜は教師が見るだけで子供に必要なのであるから、子供の歌う声域の上から考えて調子を定めている。従って何調が何曲などという詮議だてをする必要はない。」⁵ つまり、シャープやフラットの多い調であっても子供たちが楽譜を読むわけではないので問題ない、ということであり、現在のように教師が伴奏を弾きやすいことに照準を合わせるなど論外であっただろう。もう一方はいわゆる中声主義と言われる考えを詳しく記載した部分であるが、ここで彼は「すべての子供の持っている高い方の声から歌うことを導くのが、正しい練声の方法で良い結果を齎すのである」述べている。低音から高音へと歌うと地声から開始してしまうので、裏声で高い音が

らとって開始できると綺麗に声が出せるようになる、といているが、『絵本唱歌』に含まれる楽譜を確認すると、実際に高音で開始する曲が非常に多い。今でも節分の時期によく歌われる《まめまき》などはその好例といえる。

『絵本唱歌』の場合には子どもにとって「良い」歌を選択して美しく歌を歌わせることに主眼が置かれていることから、星本の場合とは教材作成における留意点などは異なるものの、教材の体裁については子ども興味を誘導しようとするところを意図している点において共通する。

4. まとめ

小学校音楽教科書と星本における情報の提示方法について順を追って確認してきた。また併せて、昭和初期に発行された『絵本唱歌』の例も一部示した。そこから明らかになったのは、教科書に託された役割の差異である。小学校音楽教科書は、児童が修得すべき内容をなるべく全て紙面上に載せようとするのに対し、星本はできる限り厳選した情報のみを載せようとした。星本の紙面は、『絵本唱歌』に近似している。

見方によっては、星本は知的障害者のために作成された教科書であり、また『絵本唱歌』も幼稚園から小学校1年生を対象にした教科書であることから、小学校音楽教科書と異なるのは当然、と捉えることはできるだろう。だが、知的障害をもつ子どもが小学校のクラスに含まれるケースは珍しいことではなく、むしろ一般的となっていることを考慮すると、使用する教科書のあり方についても再検討の余地がある。

一方で、『絵本唱歌』や星本のような教科書をそのまま小学校で用いるのも無理があるだろう。『絵本唱歌』や星本は徹底的に子どもの立

場に立って教科書の見やすさを重視しているが、小学校では一度に多くの児童を指導する必要があり、また教師も音楽のエキスパートばかりとは限らない。準備時間も限られるなか、音楽専門の教師以外が今日の教科書に盛り込まれた内容を自身で発想することも現実には難しい。

児童に必要な教科書掲載必須事項を厳選すること、そしてその表記の方法を見直すことで教科書の見やすさは改善できるのではないか。表記方法の見直しについては、具体的には、目標や指示を紙面の複数箇所に様々な表記で配置するのではなく、集約してコンパクトに示すこと、あるいは既に設けられているQRコードを活用して、紙面以外の部分に詳細に記載する、といったことが考えられる。特にQRコードの活用は、音源や動画の情報も共有できる点において、新たな音楽科の授業を考案するには今後多くの可能性を秘めている。

おわりに

本稿をまとめるにあたり、改めて各時代の教科書には各時代の抱える背景が存在すること、そして各時代の教科書作成者の切なる思いを痛感した。時代が今から大きく転換しようとするなか、教科書のあり方も変更不可避となるだろう。本稿は、今日用いられている教科書について、情報の提供方法、つまり「見やすさ」の視点からその課題について検討した。これらの課題の大部分は、今日開発の著しいICT活用により改善できるはずである。

注

- 1 文部科学省, 2011: 4.
- 2 文部科学省, 2011: 14-15.
- 3 福井, 1933: 48.
- 4 だが、当時の彼らの考えをそのまま盲信するわけにはいかない。彼らの時代における状況下や子どもを取り巻く歌曲の状況から、彼らが必要と考えた選曲方針であり、現在の状況において彼らが「よし」としたものがそのまま当てはまるわけではない。
しかし、『絵本唱歌』に掲載された曲のなかには《チューリップ》や《まめまき》のような現在も歌い継がれている曲もあり、それらの曲を扱う上では大変参考になる。また、児童の唱歌指導の際に指導のヒントとなる点が多く含まれていることは間違いない。
- 5 福井, 1933: 49.

【参考・引用文献】

- 小原光一ほか, 2017, 『小学生のおんがく1』, 教育芸術社.
小原光一ほか, 2023, 『小学生のおんがく1』, 教育芸術社.
斎藤一雄, 2016, 「特別支援学校知的障害者用音楽科教科書の教材分析」『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』22, 23-28.
文部科学省, 2017, 『おんがく☆』東京書籍.
文部科学省, 2017, 『おんがく☆☆』東京書籍.
文部科学省, 2017, 『おんがく☆☆☆』東京書籍.
文部科学省, 2011, 『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』東京書籍.
文部科学省, 2023, 『おんがく☆』東京書籍.
文部科学省, 2023, 『おんがく☆☆』東京書籍.
文部科学省, 2023, 『おんがく☆☆☆』東京書籍.
文部科学省, 2020, 『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』東京書籍.
新見徳英ほか, 2017, 『おんがくのおくりもの1』, 教育

出版.

新見徳英ほか, 2023, 『おんがくのおくりもの1』, 教育

出版.

乗杉嘉寿編, 1936, 『エホンシャウカ』音楽教育書出版

協会.

福井直秋, 1933, 「[絵本唱歌]の歌曲について」『幼児

の教育』33(3), 48-51.